

日本手話会話におけるろう者の言語使用

ー 年代別のろう者のマウジング使用頻度に着目して ー

岡田智裕(総合研究大学院大学) 坊農真弓(国立情報学研究所・総合研究大学院大学)

1 はじめに

本発表は、日常的に日本手話を用いるろう者の、会話におけるマウジングの使用頻度を年代別で分析し、ろう者の言語使用の一部を明らかにすることを目的としている。マウジングの使用頻度から明らかになると予想される事象は、日本手話と日本語との接触からみる、ろう者のバイリンガル言語使用の実態である。

2 先行研究

1998 年 12 月、オランダの Leiden 大学において、手話使用における口の役割に関するワークショップが開催された(Boyes-Braem & Sutton-Spence 2001)。そのワークショップをきっかけに、口に関する研究がヨーロッパを中心に次から次へと発表された(Crasborn et al 2008; Mohr 2014, Bank et al 2016)。手話使用における口の役割は、総じて Mouth Action と呼ばれ、大きく分けて Mouth Gesture(以下、マウス・ジェスチャー)と Mouthing(以下、マウジング)の2種類が挙げられる。マウジングは音声言語から派生したものであるが、それに加え、手話において意味論、韻律的な役割を果たすものである(Sandler & Lillo-Martin 2006:105)。マウス・ジェスチャーは音声言語からの派生とは異なり(Boyes-Braem & Sutton-Spence 2001)、手話の中で形成されたもの(Crasborn et al 2008)である。Bank et al (2016)は、オランダのろう者 70 名(17~84 歳)の手話会話において、Mouth Action のうち 80%以上がマウジングであったと報告しており、またマウジングの使用は、年齢や性別は関連性がないと述べている。

しかし一方で、アイルランド手話の場合、データは対話ではなく一人語りであるが、18 歳から 50 歳以上のろう者 12 人の Mouth Action を分析した結果、18~35 歳のグループでは男性と女性のマウジングの割合がそれぞれ 56.2%, 73.7%であったのに対して、50 歳以上のグループのマウジングは男性が 10.9%, 女性が 64.5%と差が見られたと報告している(Mohr 2014)。50 歳以上のグループにおいて男女のマウジングの差が見られた理由は、アイルランドの聾学校では昔は、男子の聾学校と女子の聾学校に分かれており、男子の聾学校では手話で教育を受け、女子の聾学校では口話で教育を受けていたからではないかと指摘している。

その他、Crasborn et al (2008)では、イギリスとオランダ、スウェーデンのろう者の男女それぞれ1名の手話語りの Mouth Action を分析したところ、どの国のろう者も Mouth Action の中でマウジングが一番、頻度が高かったと報告している。

一方、バリ島の北部にある Bengkala 村では、ろう者だけでなく、ほとんどの聴者も Kata kolok という手話を用いて会話しているが、ろう者のマウジングは事実上、存在しないと報告している(De Vos & Zeshan 2012:17)。

3 問題点と研究目的

Mouth Action に関する国内外の研究について、次の問題点が考えられる。マウジングの使用の割合に関する研究は、スイス・ドイツ手話(Boyes-Braem & Sutton-Spence 2001)やアイルランド手話(Mohr 2014)、オランダ手話(Bank et al 2016)などが挙げられる。一方、日本の場合、鶴田(2004)や坊農(2009)が挙げられるが、それらの研究はマウジングの産出規則の報告に留まり、手話会話におけるマウジングの使用の割合に関する研究はなされていない。以上のことから、「はじめに」に記したように本発表は日常的に日本手話を用いるろう者の、会話におけるマウジングの使用頻度を年代別で分析し、ろう者の言語使用の一部を明らかにすることを目的とする。

4 データと分析手法

ここでは、本研究に用いたデータと計算方法について述べる。

4.1 データ

日本手話話し言葉コーパスプロジェクト(Bono et al. 2014)の一環として収録されたデータを用いる。本コーパスデータは、現時点では群馬県と奈良県、長崎県、福岡県、石川県、富山県、茨城県の7県を収録しているが、その中でも本研究では、男性しか収録されていないが20代から80代までと年齢の幅が一番広い石川県のデータを用いた。これはアノテーション開始時点で、アイルランド手話の研究(Mohr 2014)における年代別のマウジングの使用頻度との比較を想定していたことに起因している。

本コーパスデータには、基本的にアニメ説明課題やアニメ視聴課題、カレー作り説明課題、おらが国自慢(自分の地域の自慢)課題、手話表現の差異の課題と5つの課題が収録されており、それぞれ二人対話で収録されている(図1)。今回は、比較的に会話の内容の自由度が高い「おらが国自慢課題」のうち、20代、40代、60代、80代のデータを用いた。そして、石川県のろう者は40代のろう者を除いた全員が「聴者の親の元に生まれ、地域の聾学校に通ったことのあるろう者」であることに留意したい(表2)。



図1 石川県の二人対話の映像データ(80代のろう者)

4.2 分析方法

分析には映像分析ソフトウェアELANを用いた。Crasborn et al (2008)やMohr (2014)は、マウス・ジェスチャーやマウジングをカウントして、Mouth Actionのうちのマウジング、あるいはマウス・ジェスチャーの割合を求める方法を採用している。マウジングの使用頻度を求める方法は様々であるが、ここでは、発話時間とマウジングのモーラ数を割ることでマウジングの使用頻度を求めた。

$$\text{マウジングの使用頻度} = \frac{\text{マウジングのモーラ数}}{\text{発話時間}} [\text{拍} / \text{s}]$$

マウジングは音声言語の日本語と同様の口の動きである。ここでは、正確かつ明確な日本語でなくても、途中で言いよどむ場合もマウジングとみなして口の動き全体のモーラ数を求めた。次に、発話時間については、手が動き始めた時点、あるいはマウジングと使い始めた時点を開始点とし、手を下に降ろし始めた時点、あるいはマウジングとしての口を閉じる、または口の動きが保持され始める時点を終点として、それらの間隔を発話時間とした。

この分析では、マウジングがあまり見られない場合はマウジングの使用頻度が低くなる。マウジングが一回も見られなかった場合はマウジングの使用頻度は0となる。反対に、マウジングを積極的に活用している場合はマウジングの使用頻度が高くなる。

5 分析結果

20代から80代までのろう者の二人対話のマウジングのモーラ数と発話時間、そしてマウジングの使用頻度を図2に示

す。マウジングの使用頻度は、80代のろう者がそれぞれ1.32[拍/s]、1.55[拍/s]で、60代のろう者がそれぞれ2.52[拍/s]、2.12[拍/s]、40代のろう者がそれぞれ4.13[拍/s]、2.54[拍/s]、20代のろう者がそれぞれ5.88[拍/s]、4.36[拍/s]であった。80代と比べると、20代の方がマウジングの使用頻度が高いことが読み取れた。

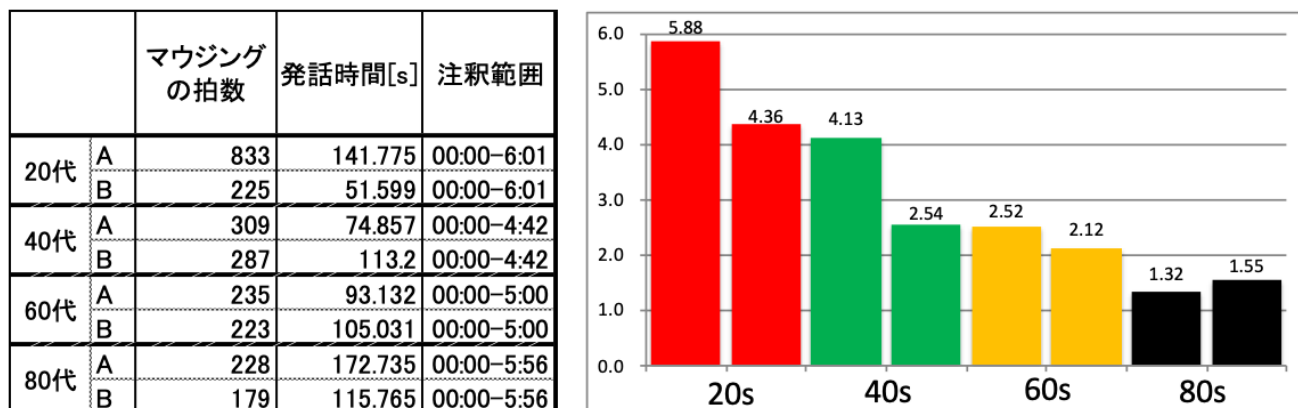


図 2 年代別のろう者のマウジングの使用頻度

6 考察

80代から20代へと年齢が低くなるにつれて、マウジングの使用頻度が高くなっていくことがマウジングの使用頻度分析から明らかになった。マウジングのモーラ数だけを見ていくと、20代Bのマウジングのモーラ数は225拍で、一見すると60代Bや80代Bのほうが多いと思うかもしれないが、発話時間を考慮すると20代Bは、60代Bや80代Bの2分の1と短く、2分の1の時間でこれだけのマウジングを使用することに驚きを感じる。

年齢層が低いほどマウジングを多く用いているのである。この事実を理解するためには、マウジングの派生と日本におけるろう教育について考える必要があるだろう。マウジングは音声言語から派生した口の動きである。分析対象のろう者が接触する音声言語は日本語である。Bank et al (2016)によると、マウジングは音声言語と手話を同時に表現するコード・ブレンド(Code-blends)と述べている。すなわち、20代のろう者は日本語と手話をコード・ブレンドした結果、マウジングが積極的に活用されたと考えることが可能である。

上述したようにアイルランド手話におけるマウジングを観察したMohr(2014)は、50歳以上の女性が男性と比べてマウジングの使用頻度が高いという事実は、口話教育の影響であると述べている。日本の場合はどうであろうか。日本の聾学校における教育指針の変遷を表1にまとめた。

表 1 日本の聾学校における教育指針の変遷

明治11年 (1878年)	京都にて盲啞院が開設し、聴覚言語障害教育が発足した。当時は、読話や発語も取り入れていたが、筆談と手話が中心の教育であった(全日本ろうあ連盟出版局 1991:31)。
明治20年代	国内で、多くの学校が設立されたが、教育方法は手話・筆談が中心であった(全日本ろうあ連盟出版局 1991:33)。
昭和8年 (1933年)	「鳩山文相は『口話教育に努力されたし』と強調する。このあと、全国の聾学校は、ほとんどが口話主義となる」(脇中 2009:35)
昭和15年 (1940年)	全国の聾学校72校のうち、手話教育を行っていたのは大阪府立聾口話学校と市立浜松聾啞学校の2校のみであった(梶本2012)。

表1から、1940年の時点で、石川県の聾学校では少なくとも口話教育はなされていたと予想される。しかし、手話コーパス収録時に取ったアンケート結果をまとめた表2の「手話を使うようになった時期」を見ていくと、遅くとも小学3年生までには全員が手話を使い始めていたことから、石川県の聾学校では口話だけでなく、手話も併用して教育していたのではないかと予想される。しかし、昔と今の石川県の聾学校の教育指針をこの先行研究やアンケート結果から比較・推測することは困難であることから、口話教育の影響で、年齢層が低いほどマウジングの使用頻度が高くなっていったとは、現時点では断定はできない。

表 2 石川県のろう者の情報

		乳幼児	小学	中学	高校	手話を使うようになった時期	親がろう者であつたかどうか	家族が手話を使っていたかどうか
20代	A		聾学校			小学3年	×	×
	B		聾学校			最初から	×	×
40代	A		聾学校			7歳	×	×
	B		聾学校			4歳	○(母親)	○
60代	A		聾学校			小学1年	×	○
	B		聾学校			小学校	×	×
80代	A			聾学校		小学1年	×	○
	B		聾学校			小学校から	×	×

7 おわりに

今回は、石川県の20代から80代までのろう者の手話対話におけるマウジングの使用頻度をもとめた。その結果、80代から20代へと年齢層が低くなるにつれて、マウジングの使用頻度が高くなっていくことが明らかになった。しかし、年齢層が低くなるにつれてマウジングの使用頻度が高くなっていく理由は現時点では断定できない。Bank et al (2016:1297)は、より高い教育を受けたろう者ほどマウジングは多くなっていると述べている。Bank et al (2016)の考えに従うならば、日本語が堪能なろう者ほどマウジングの使用頻度が高くなっていくと言えるかもしれない。これは、今後の課題としたい。また、石川県でなく、他の都道府県も分析して、全体的に石川県と同じように、年齢層が低くなるにつれてマウジングの使用頻度が高くなっていく傾向にあるかどうかを確認したい。

謝辞

本研究は科学研究費補助金基盤研究B「手話・触手話・指文字にみる日本語の影響とマルチモダリティ」(代表：坊農真弓)(17KT0065)によって支援されている。

参考文献

- Bank, Richard, Crasborn, Onno, Van Hout, Roeland. (2016). The prominence of spoken language elements in a sign language. *Linguistics*, 54(6), 1281-1305.
- 坊農真弓 (2009). 日本手話会話におけるマウジングと言い直し. *信学技報*, 57, 13-18.
- Bono, Mayumi, Kouhei Kikuchi, Paul Cibulka, and Yutaka Osugi. (2014). "A Colloquial Corpus of Japanese Sign Language: Linguistic Resources for Observing Sign Language Conversations." In *Lrec 2014*, 1898-1904.
- Crasborn, Onno, Van der Kooij, Els, Waters, Dafydd, Woll, Bencie and Mesch, Johanna. (2008). Frequency distribution and spreading behavior of different types of mouth actions in three sign languages. *Linguistics*, 11(1), 45-67.
- De Vos, C., & Zeshan, U. (2012). Introduction: Demographic, sociocultural, and linguistic variation across rural signing communities. In Zeshan, U. & De Vos, C. (Eds.), *Sign languages in Village Communities: Anthropological and linguistic insights*, 2-23. Mouton De Gruyter.
- 梶本勝史. (2012) 私立浜松聾唖学校の日本語指導:「助詞の手話」についての聞き取り調査. 聾史レポート集 第二集, pp. 131-164
- Mohr, Susanne. (2014). *Mouth Actions in Sign Languages: An Empirical Study of Irish Sign Language*. Mouton De Gruyter.
- Sandler, Wendy, Lillo-Martin, Diane. (2006). *Sign language and linguistic universals*. Cambridge University Press.
- 鶴田さくら (2004). 日本手話におけるマウジング. 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科第13期卒業研究発表会.
- 脇中起余子. (2009) 聴覚障害教育 これまでとこれから: コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に. 北大路書房
- 全日本ろうあ連盟出版局. (1991). *新しい聴覚言語障害者像を求めて*. 財団法人全日本聾唖連盟出版局.